

駿建

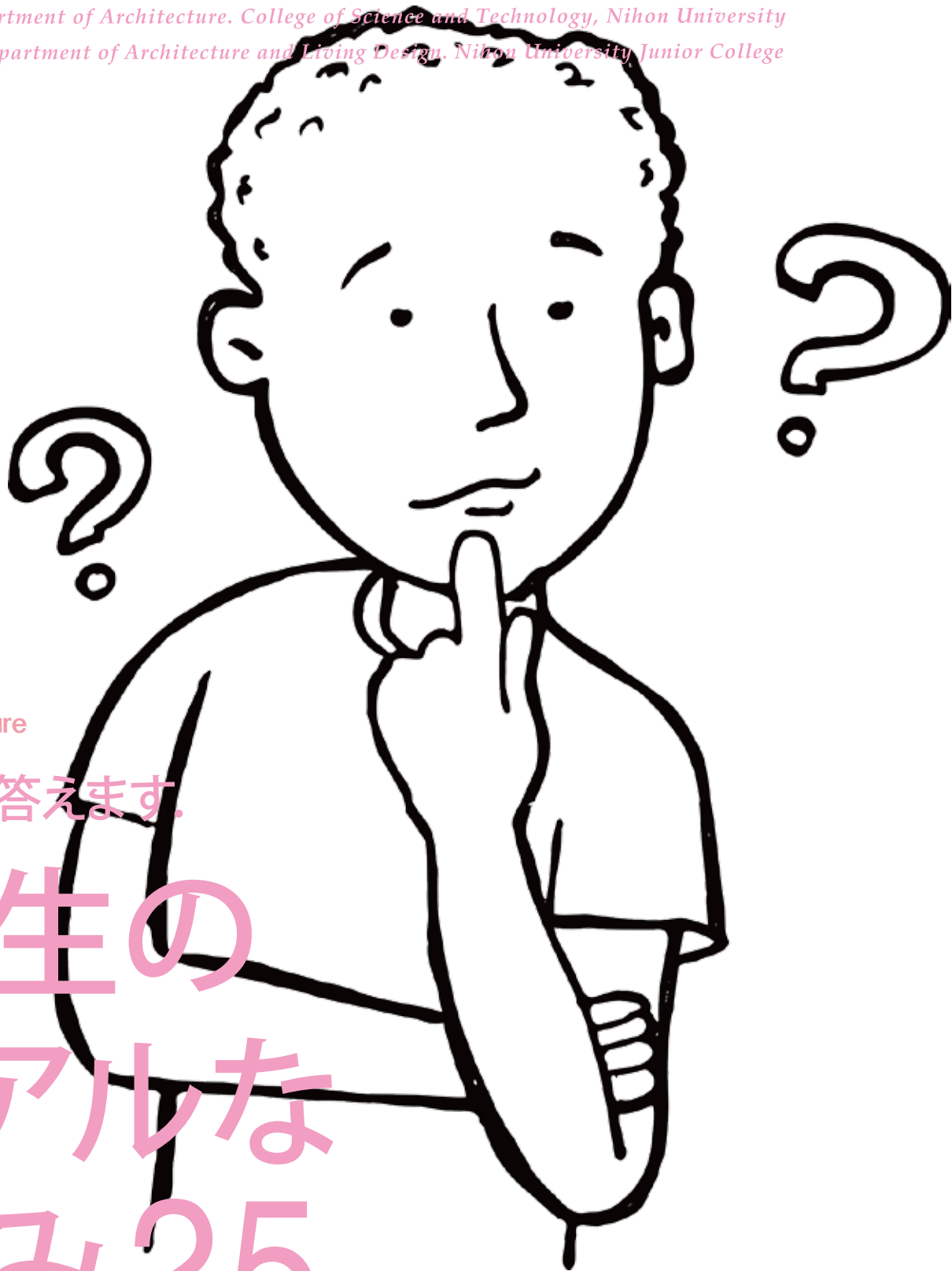
2015 Apr. vol.43 No.1

日本大学理工学部建築学科 日本大学短期大学部建築・生活デザイン学科

SHUNKEN

Quarterly Journal of

Department of Architecture, College of Science and Technology, Nihon University
& Department of Architecture and Living Design, Nihon University Junior College



Special Feature

先生が答えます。

学生の
リアルな
悩み25

Special Feature

先生が答えます。

学生の リアルな 悩み25

今回は、1年生から大学院生まで、
学生のリアルな悩みに
先生たちが答えるかたちで特集を組もうと、
アンケートを行った。

寄せられたのは、164名分の悩み。
素朴なものから、文字にできないような
「リアル」過ぎるものまで、さまざまだった。

今回はその中でも、多く寄せられた
25の悩みについて、先生たちが答えていく。



Introduction

やりたいことが見つからなくても大丈夫。

田中元子 (mosaki/ 駿建編集委員)

今回の特集を組むに際し、学生の皆さんにアンケートを取った。悩みの内容は十人十色かと思いきや、意外と、ある傾向が見られた。特に「やりたいことが見つからない」という漠然とした将来への不安が一番多かった。気持ちは、わからないでもないのだけれど。

やりたいことがわからないとか見つからないとかで悩むヤングに言いたい。そんなものは、なくなっても大丈夫。けど、なくても大丈夫だと言ってくれる環境が、なさ過ぎる。本当は大丈夫なのに、そんな環境のままにしている大人たちもいけないよね。ごめんね。

でも、大人のせいでも誰かのせいでも、自分の力で乗り越えなきゃいけないことが、世の中にはたくさんある。ハードに聞こえるけど、その分楽しいこともたくさんあるから、そこは自分のためにも、ちょっと大目に見てほしい。

で、どんなふう到大丈夫かは、ひとりひとり違うから、ここで一括りに言うことはできない。

別に死にはしない、とだけは言えるけど、キミら、死なない、なんて言葉、なんの励みにもならないでしょ？ 生物として生きるか死ぬかじゃないんだよね、死んでるように生きたくないんだよね。ちゃんと生きてるように、つまりいきいきと生きたいんだよね。わかってるって。でもね、やりたいことがあったとしても、いきいき生きられる保証はない。何となく、そう見える、気がする。それはね、お化けと一緒になんだよ。本当は実体のないものが、惑わせてる。

やりたいことが見つかっていないことは、本当は恥ずべきことでも、ダメなことでもないよ。仮にやりたいことが見つかったとして、それが高尚である必要もない。そんなものがなくなっても、誰も失望しない。何となく誰かに、何かに、立派であることを求められている気がするだけ。それより、ヤングをモヤモヤとした不安に陥れる、そのお化けみみたいな幻想に、心身がやられないようにすること。やられそうになったら、いつでも先生に話して。話、聞いてくれるから。

それでもやりたいこと、やっぱりどうしても今すぐ見つけたかったら、消去法で。まず、やりたくないことや、逃げ出したいこと、止めたいことから並べていくといいよ。自分についてでもよし、親や先生、社会が相手でもよし。

やりたいこととか自分自身とかいうものは、どこかに確固として存在しているのではなく、そういう他愛のない選り好みみたいところで、アメーバ状に蠢いているんじゃないかと思うんだ。そう、将来を考えるってことは、まずは自分自身を、丁寧に見てあげるってことかもしれないね。

時間の使い方 ／アルバイト ・お金／住まい ／人間関係 ・健康

時間の使い方

●バイト、サークル、勉強、すべて頑張りたいのですが、忙しくて困っています。(1年・女子) ●やりたいことが多すぎて、時間が足りません。もっと時間を大切にしたいです。(1年・男子) ●大学が忙しすぎて、なかなかデートができません。(1年・男子)

●春と夏の長期休暇が、これまでに体験したことがないくらい長くて、どんなことをすればいいのかわかりません。何かよい過ごし方はないでしょうか。(1年・女子)

あなたにとっての時間の価値はどこにある？ 今という時間を見つめ直そう！

田嶋和樹 准教授

「やりたいことが多くけど時間が足りない」という問題。例えば、この文章の「時間」を「お金」に置き換えてみると、「ほしいものが多いけどお金が足りない」となります。この場合、「優先順位の高いものだけ買う」あるいは「アルバイトなどをしてお金を増やす」という行動がすぐに思いつくことからわかるように、それほど難しい問題ではありません。

さて、話を時間に戻します。1日24時間という不変のルールがある以上、やれることには限界があります。ここで注意すべきは、この問題が自己完結型の問題であるという点です。つまり、時間を支払うのも、時間を使って何が行動するのも自分自身です。だからこそ行動に対する時間の価値を自分で適正に評価していないと、簡単に時間の無駄遣いをしてしまいます。まず、この点を認識することがとても重要です。

では、どのようにして時間の価値を評価すべきなのか？ 個人差が生じるため正解はありませんが、学生時代には将来なりたい自分を想像して、今の自分がすべきことを考えることをお勧めします。アルバイト、サークル活動、勉強、デートなどの時間には、それぞれ必ず何らかの価値が存在します。そして、それらが将来の自分をどのように形成するのか真剣に考えてみる必要があります。もし、自分ではよくわからないという人は、自分が描く将来像に近い先輩や人生経験豊富な大人に具体的に相談してみることです。なぜならば、このような問題は、誰もが悩み、苦労しながら、その人なりに解決してきた問題だからです。

長期休暇が取れるのは今だけ。だからいろいろな国、都市へ旅行に出かけよう！

長岡 篤 助教

大学生生活の長期休暇は、普段できないことをする絶好のチャンスです。授業がある前期、後期は設計などの課題に追われ、まとまった時間はほとんど取れないと思います。長期の休みを利用して、設計事務所などでアルバイトをするのがよいでしょう。夏休みなどに建築学科の大学生を、就職活動とは関係なくインターンとして受け入れている設計事務所もあります。

また、旅行に行くこともお勧めします。皆さんは建築学科の学生なので、日本のいろいろな都市やまちに行き、多くの建築物を見てほしいです。今はインターネットや書籍などで簡単に現地の様子がわかり、建築物の概要もすぐに収集できます。でもそれは、あくまで「様子」や「概要」に過ぎません。現地へ行き、自分の目で見ることは全く違います。実際に建築物を見ると、大きく印象が変わることがよくあります。建築雑誌などは多くの場合、竣工時の写真を使用していますので、完成後の使われ方は見に行かないとわかりません。また、建築物は周辺との関係がとても大切です。どのような土地、地域、まちに建っている建築物なのかは、現地に行つてはじめてわかります。

海外旅行もチャンスがあればぜひ行ってください。私は大学生のとき、友人と2人でヨーロッパを約1ヶ月旅行しました。初めての海外旅行だったこともあり、そのときの感動は今でも鮮明に覚えています。バルセロナの市街地を歩き、ガウディが設計した建築物を見たときは、心が震えました。

先生が答えます。

学生のリアルな悩み25

アルバイト・お金

●お金がほしくて短期のアルバイトを探しているのですが、いざ探すとどんなバイトがよいのか迷ってしまい、なかなか決まりません。オススメのアルバイトがあれば教えてください。(1年・男子)

どんなバイトもあなたの糧になる。大事なことは建築学科の学生であること。

佐藤慎也 准教授

さすがに大学の先生からアルバイトをススめるわけにはいかないな。せっかく学費を払って大学に通ってるんだから、勉強してほしいというのが本音。収入を得るためにバイトをし、授業を欠席して、学費を無駄にしてはわけがわからない。強いて推薦できるとすれば、設計事務所の模型製作などのバイト。これはお金がもらえると同時に、建築の勉強にもなる。実務に関わる人たちと会話もできるし、その人たちが働いている様子もわかり、自分の将来を考えるためにも役に立つ。実際の建築物の図面を見ることは勉強になるし、自分が模型をつくった建築物が完成すれば、なんだかうれしい気分になる。大学内にもバイトの案内が掲示されていたり、多くの先輩たちがバイトをやっているの、紹介してもらったらよいだろう。

なんて答えだけだと、さすがにつまらないよね。一個人としては、学生時代にバイトを通して世の中を見ることは、どんなことをやって自分のためになると思う。大学を離れ、広く人間関係をつくっていくことは、決して無駄にはならないだろう。建築をつくるためには、それを使う人たちのことを考えなければならぬから、カフェでのバイト経験はきっとカフェの設計に役立つし、オフィスでのバイト経験はきっとオフィスビルの設計に役立つ。だから、バイトなんて何でもいい。とはいえ一番大切なことは、自分が建築学科の学生であるということ。そこを忘れてバイトに精を出す学生がいっぱいいるけど、そのバイト先で一生働くわけではないでしょう？

住まい

●2年生になったら、都内に引っ越したいと考えています。でも、東京のことをよく知りません、引っ越すには、どこがオススメですか。(1年・男子)

いろいろと調べながら、東京中を散策してみよう！好きなまちが必ずあるはず。

廣石秀造 短大助手

都内のことをよく知らないなら、まずは自分でいろいろと調べてみましょう。建築を学ぶ上ではどのようなまちや建物(物件)があるのか調べてみることも大切です。駿河台キャンパスは、JR御茶ノ水駅、東京メトロ御茶ノ水駅や新御茶ノ水駅のほか、多くの駅が徒歩圏内にあり、乗り入れている路線も数多くあります。通学時間や予算と相談しながら、自分の住みたいところを探してみてください。多くの学生が住んでいるのは、総武線や都営新宿線沿いでしょうか。

都内も場所によってまちの雰囲気がまったく異なります。気に入る場所があったら、なぜ気に入ったのか、理由も考えてみましょう。また駿河台キャンパス近くには、地域活動付学生マンションの「ワテラスチューデントハウス」もあります。そのほかにも、留学生との交流も可能な「東京国際交流館」やシェアハウス、あるいは自分で改装可能な物件に友達と数人で住むなど、みなさんがイメージする一般的な一人暮らし以外の選択肢を選んでいる学生もいるようです。駅から徒歩何分、築何年、バス・トイレ別などの検索ではヒットしない多様な選択肢が存在します。せっかくの機会なので、自分でいろいろと調べて、いろいろなまちを探索してみてください。

ちなみに、大学の近くに住む学生の方が、気が緩むのか遅刻しがちなように思います。電車の中は読書をするにも適しているので、私はほどよく距離のあるところがお勧めです。その場合、電車の混雑状況もあわせて調べましょう。

人間関係・健康

●お酒を飲むと、酔うよりも先に頭痛がくるほど弱いです。今はまだよいのですが、社会人になり飲み会が増えると思うと心配になります。(4年・男子)

飲めないことは気にしないで、飲み会にはどんどん参加しよう！

長岡 篤 助教

体質的に飲めないのは仕方のないことです。日本人の約4割はアルコールに弱いという調査結果もあります。私もアルコール全般に非常に弱いです。コップ1杯のビールで顔が赤くなります(笑)。そして、必ず二日酔いで眠くなります(苦笑)。確かに社会人になるといろいろな人たちと飲む機会は増えます。でも私はできるだけ欠かさず飲み会には参加してきました。飲み会ではお酒を飲まなくてもよいのです。飲めない代わりにいっぱい食べて、好きな食べ物を注文しましょう(笑)。

飲み会は飲むことが目的ではなく(そういう人もいますが……)、その場の雰囲気を楽しんでいろいろな人と会話することに意味があると私は思います。以前よりは減ったと言われていますが「飲みニケーション(?)」は、やはり必要で、普段あまり接する機会がない上司や先輩、同僚、後輩と話すよいきっかけになります。また、改めて話すのは躊躇するような話題でも、飲み会では話しやすくなることが多いようです。人間関係が広がる大きなチャンスでもあります。

ただし、酔っ払って絡んできた人に対しては、軽くあしらいましょう。またしつこくアルコールを勧められたらはっきりと断って構いません(これは大事です)。飲めない人は意外に多いです。私の感覚では、20人に1人ぐらいはほとんど飲めないのではないのでしょうか。なので、あまり悩まずに飲み会にはどんどん参加してください。

恋愛／将来に 対する不安

恋愛

●今彼女がいて、毎週会っているのですが、2年生になったらもっと忙しくなるので、会えることが少なくなるかと思うと、寂しいです。僕は建築を取るべきでしょうか、彼女を取るべきでしょうか。(1年・男子)

●彼女がぜんぜんできません。女友達はある程度いますが、女性と話すのが苦手です。どうしたら、克服して、彼女ができるようになりますか。(3年・男子)

不安な気持ちはわかるけど社会へ出るともっと大変。彼女と話してみるべきでは。

山崎 誠子 短大准教授

あなたが、今の彼女を生涯愛して、人生悔いがないなら、どうぞ建築ではなく、彼女を取ってください。しかし、それはあくまで、彼女の同意があつてのことです。だからそのときは、僕の人生を君にかけよ、と彼女に決意を伝えてください。しかし、くれぐれも「まじ?」「うざい」と言われないように(笑)。もし、そんな行動は取れないよ、と躊躇するなら、まだ、あなたにとって彼女は、それほど重要な存在ではないかもしれません。けれど、そもそも1年生で、建築の何がわかったのでしょうか? そして、彼女のことも同じ、すべてがわかったのでしょうか?

1年生の今くらいの授業や忙しさで、彼女と建築を両立できないのなら、社会に出て、建築の仕事に就くことも難しいかもしれませんね。建築はクライアントや設計者、現場施工者との共同作業です。人や時間、予算など、いろいろなところにバランスよくパワーをかける必要があります。そして、彼女と仕事の両立も同じことです。彼女ひとりでさえも、自分の時間のなかでコントロールして、うまく付き合うことができないのなら、大学どころか、今後の仕事や人生も、とっちらかってしまうかもしれません。

まあ、彼氏、彼女と付き合いはじめのころは、とにかく不安な気持ちになりがちです。過去、私の研究室の学生に、恋の悩みでゼミを休んだ女子学生がいました。けれど、そんな彼女も、半年後には違う彼氏がいましたよ。だから、まずこの話は、先生に聞く前に、彼女に聞いてみたらどうでしょうか。

女友達がいるなら、すごいじゃない。あと必要なのは“好き”という気持ち!?

山崎 誠子 短大准教授

女友達がいまません、女性とまったく話すことができません、という悩みならまだしも、あなたには、女友達がある程度いるんですよ。それって、すごいじゃないですか。さらに日大理工建築は、理系の中でも女子率が高い。そんななかで、あなたは女子に対して免疫ができているのだから、それって外から見れば、女子にうまく接することができる証拠だよ。

話すのが苦手ってことだけど、それ以上に何か克服する必要があるとすれば、それは何よりも大好きな女子をつくることです。人は目標を持つと今までにないぐらいのパワーが出て、スキルが上がります。

もし、あなたに大好きな女子ができれば、彼女と話すにはどうしたらよいらうとかか、彼女は何が好きなのだろうとかか、彼女はどんな趣味をしているのだろうとかか……。彼女のことを想い、行動したくなるパワーがたくさん出てくるはず。相手を好きになるパワーは、苦手な会話はもちろん、あなた自身を変えていきます。

私の友人で、フランス人が好きになってしまった女性がいました。最初、彼女はフランス語なんてまったく話せませんでした。なのに好きになって、フランス語も猛勉強して、ついには結婚しました。大好きと愛は、いろいろなものを克服する原動力になるのです。

先生が答えます。

学生の リアルな 悩み25

将来に対する不安

●建築が一番やりたいことなのかわかりません。(1年・男) ●自分が何をやりたいのかわかりません(1年・男子) ●将来に対して不安しかありません。生きる目標の見つけ方を教えてください。(1年・男) ●自分の方向性、生き方、立ち位置、全てが不安で、今にも世界から自分がいなくなってしまうようで怖いです。(1年・男子) ●将来何をやりたいのかわかりません。何をしたらよいのでしょうか。(1年・男) ●将来に対して不安です。(1年・男子) ●やりたいことがわかりません。どこに進めばいいのかわかりません。(2年・女子) ●将来の自分のビジョンが見えません。(3年・男子) ●明るい未来が見えません。そもそも建築が向いていないように思います。(3年・男子) ●就活が不安で仕方ありません。夜も寝られないです。(3年・男子)

まずは目の前のことに集中して、そこから将来のことを考えよう。

長岡 篤 助教

よほど能天気な人でない限り、将来に対して不安がない人はいないと思います。皆さんは授業もたくさんありますが、高校までとは違って、長期休暇など、ある程度自由に使える時間があるので、いろいろなことを考えてしまい、不安になるのだと思います。また、数年後には進路(就職)を決めなければならないというプレッシャーもあるはずですよ。

何をしてもよいのかわからない人も、せっかく建築学科に入学したのですから、まずは目の前の授業と課題に集中して取り組んだらどうでしょうか。Appleの創業者スティーブ・ジョブスは、大学の授業で学んだタイポグラフィが、数年後Macintoshを設計するとき大いに役立ったと言っています。このように、今は役に立たないと思っても、将来どこかで役に立つことも多くあります。しかし、授業を受けているだけでは人間の幅が広がりません。できるだけいろいろな立場の人と出会い、いろいろな分野に興味を持ち、いろいろなところへ出かけてください。アルバイトやサークル、NPOなどの活動でもよいでしょうし、旅行に行くのもよいと思います。スマホ(インターネット)ばかり見ているのは、視野は広がりにません。好奇心や探究心が旺盛な人ほど、自分の将来が明確になっていると思います。

自分の将来を決めるのは自分しかいませんが、建築学科には多くの専門分野の教員がいます。建築について悩んだら、誰でもよいので私たちのところに相談に来てください。また、どうしても建築以外の道に進んだ方がよいのでは?と思ったら、クラス担任の教員に相談してください。

とにかく目の前にあることに全力でぶつかってみることをおすすめします。

田嶋和樹 准教授

少し私の話をします。大学入学前、私は漠然と「建築家」か「教師」になりたいと思っていました。大学に入ってから、建築設計の授業で他の学生との能力差に気がきました。このとき、負けず嫌いな私は必死で設計課題に取り組むようになりました。反面、他の科目の成績は下降気味になりましたが……。

3年前期の建築設計の授業で、当時非常勤講師だった先生からの指導を受け、建築設計が面白く感じられた一方、初めてその難しさを突きつけられた気がしました。同時に、自分の限界も感じて「建築家」を目指すことを止めました。このような決断をした私を先生が褒めてくださったことを人づてに聞き、うれしく感じたことを今も覚えています。ただ、不思議なことに、切り替えは早かったように思います。教師という目標があったからでもあります。それ以上に建築設計に全力で取り組んだからだだと思います。

それからは、どんなことでも自分の全力を持って取り組み、道半ばで挫折したとしても、悔いは残らず、ある意味心地よいことを知った気がします。その後、教員採用試験に向けて猛勉強を始める一方、大学の授業にも全力を投じた結果、今まで気づいていなかった設計以外の専門分野の魅力が感じられるようになりました。その後、紆余曲折あり、運よく今の仕事に就いています。ですから、悩んだり不安に思う前に、まず自分が本当に一生懸命になれているかを省みてください。そして、とにかく目の前のことに全力でぶつかるとをお勧めします。悩むのはそれからです。

どんなこともすべては建築。建築の可能生は無量大だから、気楽に行こうよ。

佐藤慎也 准教授

いやー、将来は不安だよな。みんなが社会の中心となる20年後は、西暦2035年。みんなは38~42歳くらいで、東京オリンピックが終わって15年も経過している。その頃に世の中がどうなっているかなんて、確かにわからない。だから、将来が不安なもの仕方がない。

その頃にはさまざまな仕事が消え、さまざまな新しい仕事が生まれると言われている。しかし、そこに人間が生活していく限り、「建築物をつくる」という仕事はなくなるわけではないと思う。現在とは違うかもしれないけれど、建築をつくることから発展した新しい仕事も山のように生まれているかもしれない。

既にそのような動きは現れていて、20年前よりも、今の「建築」は拡がりを持っている。そして、その広がりを考えることは、建築を勉強することの先にしかないと思う。建築はアーキテクチャ「Architecture」の訳語だけど、今では建築だけでなく、コンピュータ・システムや社会設計のこともアーキテクチャと呼ぶ。これからの世界に生きるみんなは、建築を「Architecture」と捉える拡がりのなかで考えることが大事なんじゃないかな。

1968年、オーストリアの建築家であるハンス・ホラインは、「Alles ist Architektur(すべては建築である)」と言った。個人的にはとても好きな言葉。やりたいことを見つけることは自分自身にしかできないから、申しわけないけれど、素敵なアドバイスはできない。でも、未来に向かって建築は拡がっている。「すべては建築である」と思って気楽にやればいいんじゃない?

他人との比較 ／ 充実感 ／ 建築の未来 ／ 先生・先輩・後輩 ／ 忍耐力

他人との比較

●周りの人の作品がよく見えてしまい、何で自分は全然ダメなのかと思ってしまうことが、よくあります。(1年・女子)

●私は人と比べられるのが苦手で、共通課題が上手くいきません。どうしたらよいでしょうか。(1年・女子)

周りも先生もどうでもいい。こだわりをもって、どんどん好きにつくろう!

山崎 誠子 短大准教授

そんなに自分の作品が嫌いですか？ まず
は他人と比べるより、自分が好きなものをつ
くって満足しましょうよ。

建築をつくりあげるには、機能や法規を遵
守することは大事で、それにクライアントの
要望を重視してデザインを練り上げていきま
すよね。特に1年生の課題は、自分がクライ
アントで、どう解釈してもよいのだから、も
っと自分の好きなものをつくることに絞って
もいいんじゃないかな。

採点する先生の顔ばかり気にして自分のつ
くりたいものをつくっていないから、他人と
比べてしまったり、自分で自分のことを全然
ダメだって思ってしまったのかもしれない。自
分が好きなもの、満足するものは、人にと
やかく言われても関係ないじゃないです
か。評価は、あくまでも先生たちの基準で
あって、あなたの基準ではないのです。だか
らもっと、力を抜いてやってみて!

そして、それぞれの課題を通して、自分が
こだわるところ、面白いと思うことを、どん
どん見つけていきましょう。私も学生のとき、
卒業設計である先生に「こんな設計なんて見
たくない」と言われたことがありました。だ
けど、当時その先生の設計作品は、私はま
ったく認めてなかった(笑)。そうそう、それ
と私の後輩で卒業設計の審査会で教授陣から「こ
んな建築じゃない、卒業させない」と物議
をかました人がいました。「石上純也」さん
という方でした。

充実感

●毎日が、大学の授業、課題、
そして、アルバイトの繰り返し、
大学生活がとても退屈です。(2
年・女子)

●人生にハリがありません。ど
うしたらよいですか。(3年・
男子)

**研究室に遊びに来て! 退
屈なこと、ハリがないこと
を一緒に考えてみようよ。**

佐藤 慎也 准教授

本人に好奇心と想像力があれば、どんな環
境であっても退屈することはないんじゃない?
なんて答えは期待していないよね。ど
うしたらいいだろう?

好きなことを見つける。好きなものが何か
を考えてみる。興味を持つことができる授業
を見つける。なぜ興味を持つのかを考えてみ
る。旅行に出てみる。いろいろな場所に行っ
てみる。好きな建築物を見つける。好きな場
所を見つける。その建築物や場所がなぜ好き
なのかを考えてみる。その建築物や場所がど
のように生まれてきたのかを考えてみる。そ
れについて調べてみる。いろいろな本を読ん
でみる。いろいろな映画を見てみる。いろい
ろな音楽を聞いてみる。趣味を見つける。な
ぜその趣味が好きなのかを考えてみる。その
好きなものがどのようにつくられているかを
考えてみる。友達を見つける。友達と先輩と
先生と家族と話をする。いろいろな人に出
会って話をする。自分以外の人たちがどのよ
うなことを考えているのかを考えてみる。退
屈を楽しんでみる。ハリがないこと自体を
楽しんでみる……。

どれも満足する答えじゃないよね。きつ
とそんなことはわかっているんだけど、退
屈だし、ハリがない。それはどうしようも
ないことなのかもしれない。どうすれば
いいだろう? 僕にもわかりません。すみ
ません。僕にできることと言えば、その
退屈やハリがないことについて、一緒
に考えてみることでいいかな? ぜひ
研究室にでも遊びに来てください。
退屈について一緒に考えましょう。

先生が答えます。

学生の リアルな 悩み25

建築の未来

●僕らは、4年後、学部を卒業して、社会へ出て行くわけですが、これからの社会で必要とされる建築の分野は、どのようなものなのでしょうか。大学ではあまり教えてくれませんか。(1年・男子)

縮小する社会の中でこそ、必要とされる建築の分野は広大に広がっています。

古澤大輔 助教

この質問に答えるのは難しいですね……。他の先生だったらどう答えるのだろうか(笑)。必要とされていない建築の分野なんてないし、教員の専門分野によって答えは違ってくると思うので、あくまで僕の立場からの回答だということを前提にして聞いてください。

これからの日本の社会を一言で表せば、縮退する社会だと言われています。経済規模や生産人口が年々減っていくことが指摘されているわけです。このような社会においては、限られた資源を効率的に使っていく姿勢が求められます。ですので、省エネルギー化を目指す環境配慮型の建築や、建物の長寿命化を図る再生建築などの分野が注目されています。これらの分野は、風や光などの自然エネルギーを積極的に活用する技術、あるいは対震性能や機能性を向上させる技術など、さまざまな技術の導入が求められており、盛んに研究されています。

また、限られた資源の適正な配分を考えることは、これからの社会に関連した法律や制度はどうあるべきなのか、その国や地域の文化に適したデザインとは何かを考えることでもあるので、工学的な技術のみならず国境を越えた総合的な知見から建築を模索していく、とても奥行きのある作業なのだと思います。

僕自身、みなさんと一緒に考えていきたいと思っていますので、興味があったら相談に来てみてください。

先生・先輩・後輩

●大学で普通に生活をしていて、先輩たちや後輩たち、先生方と、もっと深く関わりたいと思っけていても、そういう機会がありません。どうすればよいのでしょうか。そのような機会は今後、どのくらいあるのでしょうか。(1年・女子)

心配しなくても大丈夫。きっかけに「オウケンカフェ」に行ってみては、どうかな？

山崎誠子 短大准教授

1年生は船橋キャンパスで、上級生がいないから、先輩たちと深く関われないことは、しょうがないですね。だけど大丈夫、これから先、知り合える時間はたくさんあります。駿河台キャンパスの5号館には建築学科の研究室がすべて入っていますから、気軽に興味のある研究室をのぞいてみてください。

今年から3年生の「ゼミナール」という科目がなくなったので、2年生から興味のある研究室に出入りしてみてもはどうでしょう。私の研究室の大学院生が3年生のとき、今村研究室に出入りしていたように、3年生までにどこかの研究室に出入りしたからといって4年生でその研究室に入る必要はありません。

ところで、先輩って怖いですか？ けれど考えてみれば、あなたとわずかに1、2歳しか変わらないんですよ。考えていることは、そんなにかけ離れてません。あなたよりも、ほんの少しだけ建築の勉強を重ねているだけです。それと、日大理工建築の先生は、みなさん声をかけやすい先生ばかりです。また、設計の授業は20名ぐらいの単位で先生が1名担当します。だから、先生と話しやすいと思います。素直に疑問をぶつけてみてください。非常勤講師の先生は、課題以外にも仕事のことも話してくれますので、勇気を出して話かけてみてはどうでしょう。毎月開催されている「オウケンカフェ」には先輩も先生もよく参加していて、イベント後は毎回飲み会があって、学年を越えた交流があるみたいですよ。ぜひ参加してみてください。授業よりずっと話しやすい感じですよ。

忍耐力

●どんな物事も、途中まではしっかりと向き合えるのですが、どうしても終わりまで続かず、あるとき何故か投げ出してしまっています。どうしたらいいのでしょうか(1年・男子)

失敗することは、恥ずかしいことじゃない。勇気を出して最後までやってみよう。

古澤大輔 助教

最近このような相談を実際に何度か受けて気が付いたことがあります。それは、相談に来る学生に共通しているのが、皆とても真面目だということです。途中で投げ出してしまおう彼らは決して飽きっぽい性格であるとか、不真面目であるとかではなく、むしろやるべき課題を完璧にやろうとする意識の高い学生です。また、自分の中で設定した高いクオリティを保てないものは、見せたくないという考えを持っているようでした。これは一見するとよいことのように思えますが、「本気になることを避ける癖」ができてしまうのが非常に問題となります。なぜなら力を抜いて途中で止めれば、「本気を出した結果、達成できなかった自分」と対峙する必要がなくなるからです。その代わりに、「次回本気を出せば達成できるかもしれない自分」という横すべりした主語があらわれ、一時的な安心感にすがろうとする思考回路に陥りがちです。

人は誰でも多かれ少なかれ自分をよく見せたいものです。そして、自分ができないという事実は認めたくないものです。しかし、その考えを一旦止めて、勇気を出して目の前のことに最後まで本気で取り組んでみましょう。本気を出した結果、失敗することは何も恥ずかしいことではありません。3割打者としてすばらしい活躍をしているメジャーリーガーのイチローですら、本気を出して挑んだ10回の打席のうち7回も失敗しているのですから。本気の失敗から人はさまざまなことを学び、失敗しても次に立ち向かうその姿を見て、人は応援したくなるものなのだと思います。

2つのコース 選択／就職活 動／就職と大 学院進学

2つのコース選択

●3年生になったら建築コースと企画経営コースに分かれますが、どのようなことを考えて判断すればよいのでしょうか。(1年・男子)

将来の進路（就職先）をイメージするところから考えてみよう。

長岡 篤 助教

皆さんは初年次からの2年間で建築学の基礎となる幅広い授業を受けた上で、2年生の後期最後に建築コースか企画経営コースを選択してもらうことになります。建築コースでは3年次以降、建築物の設計や施工、構造、設備などに関する知識をより深く学び、建築関係の技術者や建築家になることを目指します。一方、企画経営コースでは3年次以降、建築にかかわる領域を建物と土地を含めて「不動産」として捉え、建築学を学んだ上に法律、経済、経営などを学び、建築・不動産の企画・開発の提案を行える技術者や、合理的・健全な維持管理に貢献する技術者を目指します。どちらのコースでも一級建築士レベルの知識が得られるようなカリキュラムになっています。就職先は、建築コースでは建設業、住宅メーカー、設計事務所の割合が、企画経営コースは不動産、住宅メーカー、建設業の割合が多くなっています。大学院への進学は、建築コース出身者は建築学専攻、企画経営コース出身者は不動産科学専攻が多いです。

建築学科には多くの専門分野の教員がいますので、コース選択や自分が将来どのような進路に進めばよいのか迷ったら、相談に来てください。また、企画経営コースの選択を考える人は、2年生後期の「建築企画経営」を履修してください。企画経営コースのカリキュラムがどのようなものかを知る導入科目になっています。また、私をはじめ企画経営コースの担当教員である根上先生、宇於崎先生に相談に来てください。

就職活動

●3年生になると就職活動が始まります。とても不安です。就職活動って、具体的に何をすればよいのでしょうか。(3年・女子)

100%の興味じゃなくても、数%の興味で、まずは進んでみればよい!

山中新太郎 准教授

私から言えることは4つ。

まず、「自分を知る」こと。自分がやりたいと思える仕事や自分に向いていると思える仕事があるかを考えてください。自分は、どのような強みや弱みがあるかを客観的に理解することが重要です。「コンピテンシー診断」はこうした自己理解の助けになるでしょう。

次に、「企業を知る」こと。自分がやりたいと思える仕事や自分に向いている仕事をするには、どのような企業があるのかを早めに調べてください。就活は時間との勝負、知名度などにこだわらずに、対象を広げて企業研究することを勧めます。

そして、何よりも「日頃の勉強や研究をしっかりやる」こと。企業の採用担当者は、「面接などでは、自分の研究していることを、自分の言葉で、どれだけ人に伝えられるかを見ている」と言います。つまり、研究している中身のレベルとコミュニケーション能力の両方を見ているということです。日頃の勉強や研究の成果が、あなたの自信になり、あなたの武器になるのです。

最後に、「働くこと決まった会社こそ自分が“縁”のある会社なのだ、と思いつくこと。途中の選考で何があるかと前を向いて進むのみ。人間万事塞翁が馬。誰にも先はわからないものですが、就活でも仕事でも、状況を前向きにとらえられる人が、その人にとっての幸福を手にする人です。

焦らなくても大丈夫！ひとつひとつ自分のペースで進めていけば、少しずつ自信と就職の力がつくはずですよ。

先生が答えます。

学生の リアルな 悩み25

●大学院に進学するメリット、デメリットは何でしょうか。(1年・男子) ●大学院進学か就職かを考え決断するのは、いつ頃がよいでしょうか。(1年・女子) ●勉強したい強い意志がなく、大学院に行くのはどうかと迷っています。(3年・男子)

●大学院進学を選択する場合、他大の大学院という選択もあると思います。その際のメリット、デメリットはどんなことがありますか。(1年・女子)

●他大の大学院に行くためには、まず何をすればよいでしょうか。(1年・女子)

自分が就きたい職業を考えると、先生、先輩にもたくさん聞いてみて。

橋本 修 准教授

大学院は、自分の勉強したい分野の研究室に所属して、掲げた研究テーマを究めることに集中できることが、大きなメリットです。社会に出てからでは現業で手いっぱい、なかなかそのような時間は持てません。大学院で得られることは、専門的な知識が身につくことでスキルが向上することはもちろん、設計コンペや学会での論文発表の場などを通して建築に対する視野が広がること、問題解決能力が上がることで、そして何より自分の成長を自覚して自信がつくことだと思います。大学院での研究成果が自分への勲章となって、建築家や技術者などのいわゆる専門職に就ける道が開けてくるでしょう。社会に出て即戦力となる技量を貯えられると思ってください。

ただし、学ぶモチベーションが続かないと毎日がつらくなるかも。建築への好奇心と向上心は必要ですね。大学院進学への決断の時期は、卒研の研究室に着手する4年生の4月までがベストかと思いますが、これを過ぎても遅くはありません。実際に研究室に入ってから研究に興味湧いて、大学院進学を目指す人もいます。進学か就職かの判断のひとつは、自分が将来どのような職種に就きたいかを考えることでしょう。ただ授業を受けているだけではわかりません。授業内容と研究との関係は？ 研究は何に役立っているの？ 先生の研究が関連する職種は？ など、どんどん先生や大学院生に聞いてください。大学院は就職のために行くという見方もできますが、自分が好きな建築を楽しみながら自分磨きができるよい機会であると思います。

日大理工にあるものと、他大にあるものを的確に判断して早めの行動を。

田嶋和樹 准教授

自分が取り組みたい研究を専門にしている先生が学内におらず、その分野で活躍している先生が他大にいる場合、他大の大学院に進学するメリットはあると思います。例えば、RC構造の分野では、われわれの研究室は数値解析に基づく耐震性能評価に関する研究に強みがあります。しかし、例えばRC構造の火災時挙動に関しては他大の専門家が活躍しており、特殊な実験施設なども整備されています。ですので、自分が取り組みたい研究テーマが絞られてきたときに、卒研指導の先生と相談しながら他大への進学を検討するのがよいのではないのでしょうか。

一方、デメリットは、修士研究に割ける時間が少なくなる可能性があるという点です。学内進学の場合、卒業研究から修士研究まで関連性のあるテーマで継続できる場合が多く、研究内容を3年計画で深めることが可能です。実は、これは大きなメリットです。一方、他大に進んだ場合、研究テーマを具体化し、軌道に乗せるまでに時間がかかるかもしれません。大学院の授業や就職活動なども並行するので、自分の研究活動に満足するためには、相当の頑張りが必要になると思われます。

他大の大学院に進学する場合、早い段階からお世話になりたい研究室の先生にアポイントを取り、進学を希望している旨を伝え、積極的にゼミなどの活動に参加しておくことが必要です。試験対策も必要ですが、なによりその先生が指導してみたいと思うような学生になることが大事だと思います。

自分がしたい分野の研究ターゲットとマッチしているか、調べてみよう。

橋本 修 准教授

日大理工の大学院で一緒に研究しましょう！と言いたいのが本音ですが、少し冷静になって皆さんの立場になって回答しましょう。大学院進学は、自分が勉強したい研究分野の専門知識が得られ、研究成果を社会に出るための資質として役立たせることができるなどのメリットがあるのは、どこの大学においても同様かと思えます。その上で他大の大学院を選ぶメリットは、勉強したい分野の研究ができる研究室が日大にない場合や、自分が指導を仰ぎたい先生が他大にいる場合などが考えられます。

ただし、他大を選ぶ場合は、勉強する環境や校風などが異なることは当然のこと、何より自分の勉強したい分野の研究ターゲットとマッチしているか？ どのような研究をしているか？ などについて、しっかり調べておく必要があるでしょう。ネットで調べれば、研究内容や社会への貢献度は、ある程度見ることはできますが、先生や研究室が関わる公開レクチャー、他大との交流イベントなどに足を運んで、研究内容に触れてみるのが大切です。その上で志望が強ければ、大学院入試志願の前に指導を希望する研究室を訪問して、先生との面談をお願いしましょう。

ただし、その際には自分が進めたい研究の目的や内容をしっかり説明できなければいけません。日大は教員数が多く幅広い分野にわたって研究活動をしていますので、まずは日大の先生に相談をしてください。他大学の情報も教えてもらえるとありますが、この日大で頑張ろう！と思うことになるかも。

時間の使い方 ／センス／ア ルバイト／住 まい／人間関 係・健康

時間の使い方

●建築学科で勉強しはじめて3年目ですが、実際に家を建てられるような実務的なスキルが身についている気がしません。大丈夫でしょうか。実務的なスキルはいつ身につくのでしょうか。(3年・男子)

実践は社会に出してから. 大学では実務の手前にある理論を身につけるべし!

佐藤慎也 准教授

【回答その1】大丈夫。建築学科で4年間勉強するだけで、住宅を設計するための実務的なスキルは十分に身につきます。二級建築士の受験資格が得られるわけだから当たり前でしょう。建築学科のカリキュラムは、そのためにつくられています。すべての授業をしっかりと勉強すれば、間違いなく実際に住宅を建てることにつながります。設計や計画の授業はもちろん、構造を知らなければ住宅は建てられないし、環境に対する配慮だって必要だし、法規や構法、設備、都市計画、建築史など、たった一軒の住宅を建てるためにだって、すべての授業で得る知識が必要になるのです。授業をしっかりと受けていれば、そんなスキルは十分に手に入ります。安心してください。

【回答その2】そんなスキルが大学だけで身につくわけがないでしょう。建築学科では、住宅を建てるために必要なあらゆる理論を勉強します。ただし、本格的な実践は、社会に出ないとなかなか行うことができません。大学で可能な実践は、模擬的な演習に留まります。住宅を建てることは何千万円もお金がかかること。それを授業の中で実践することは不可能です。実務的なスキルは、社会に出たら、現場の中で手に入れていくしかありません。だからこそ、建築学科では、社会で身につく実務的なスキルを有効に使うことができるよう、その手前にある理論を十分に身につけることが大切です。その理論は、忙しさに追われる現場では身につけることができない、時間に余裕のある学生時代にしか手に入れることができないものです。安心してください。

センス

●建築をつくるセンスって何ですか。(1年・女子) ●自分に建築をデザインするセンスを感じません。もっとスキルアップするにはどうしたらよいですか。(1年・男子)

センスなんて気にしないで、うまくチューニングできているイケてる建築をつくろう。

古澤大輔 助教

僕はセンスという言葉はあまり好きではありません。センスは感性であり、人間の持つ知覚的な能力のひとつ。センスを否定することは、その人の人間性を否定することになるので、設計課題のエスキスなどでは慎むべき禁句だと思っています。なので、センスとは何か?自分はセンスがないのでは?などと考える必要はありません。そうすると質問に対する回答が終わるので、問題を「イケてる建築とは何か?」にシフトして答えてみたいと思います。

「イケてる」とは、ざっくり言うと「さまざまな条件をうまく調整している」ことです。建築は考えなければいけない条件が多数あり、往々にして、その条件たちは矛盾しています。例えば住宅の設計において、「とても開放的にしたいが、セキュリティも万全にしたい」とか、「目立つ外観デザインにしたいが、周辺に良く馴染ませたい」とか、よくある問題です。こういった二項対立的な矛盾する条件をたくさん引き受けて、チューニングしていく作業が建築設計です。開放的にしすぎてセキュリティを考えていなかったり、逆にセキュリティを意識して閉鎖的になってしまうのは、チューニングがうまくいっていない(=イケてない)状態です。また、チューニングする条件が少ないのも、単純すぎるのでイケてないです。

ぜひ次回の設計課題では、たくさんの条件を実装させて、しぶとくチューニングしてってください。そして、自分が設定した条件をどうやったらうまくチューニングできるのかを、先生との対話(=エスキス)の中で見つけてほしいと思います。

先生が答えます。

学生の リアルな 悩み25

アルバイト

●設計事務所でオープンデスクかアルバイトをしたいと考えているのですが、建築を学んで1年目の知識では難しいでしょうか。「お前なんかいないよ」と言われそうで怖い。非常勤の先生にもなかなか言い出せません。(1年・女子)

気軽にチャレンジ！ 他大学の学生など、人との出会いも、また勉強になります。

古澤大輔 助教

設計事務所がオープンデスクあるいはアルバイトに求めるのは、ほとんどの場合、模型製作の仕事です。設計図は機密情報を多く含むものなので、新米のアルバイトにCADなどで図面を描かせる事務所は非常に少ないです。模型製作以外の建築に関する知識は、特に期待はされていないので気楽に考えてもらって結構ですよ。

時期的には一通り模型製作ができるようになる2年生の後期くらいからは始めるのをお勧めします。大抵、どの事務所でも参加条件を定めているはずなのでホームページなどでチェックしてみてください。ちなみに参加したい設計事務所はどこか決まっていますか？決めかねているのだったら、先生や非常勤講師の先生にお勧めを聞いてみましょう。もし決まっているのであれば、ぜひ勇気を出して連絡を取ってください。

僕も学部2年生になったときに、とある設計事務所に電話して「興味があるので、ぜひ見学させてください」と伝えたら、そのまま4年生の後期まで3年間アルバイトさせてもらいました。そのときに知り合った事務所のスタッフの方や参加していた他大学の学生からいろいろなことを教わり、今につながるともよい経験になりました。

いずれにせよ、オープンデスクやアルバイトは、事務所のスタッフの方や参加している他大学の学生とコミュニケーションをとることが一番の勉強になるので、気軽に参加してみるのはいかがでしょうか？

住まい

●建築をデザインしたり、つくったりするのは好きなのですが、建築をわざわざ見に行こうと思えないのです。周りの人達は見に行っていたりするので焦っています。問題はないでしょうか。(1年・男子)

実物を体験することは、模型や図面以上に大切なことが詰め込まれている。

橋本 修 准教授

建築をデザインするのが好き、というモチベーションは大切。ぜひ持ち続けてください。建築が好きなのに「建築をわざわざ見に行こうと思わない」のは何故なんだろう？と、あなたが自分自身に問いかけてみるのが、自分の思考や嗜好を観察するためのよい機会になるのではないのでしょうか。

ここではその思考の憶測を含めて、さらに回答したいと思います。質問の中に、「つくったりするのは好き」とありますが、これは建築模型のこと？ 建築模型は建築をつくるプロセスにおいて大事な過程です。ただし、三次元立体として建築を見ることができませんが、模型は実物大ではないので、空間として人が体感することは難しいですね。ここで、建築のユーザ側に立って考えてみると、人が使う立場でのスケール感や使い勝手、採光や気流などの環境、構造的な安全性の工夫など、トータルな視点からの評価が必要になってくることがわかります。

建築空間を創造することが好きなら、好きな建築家がいるなら、見に行かなければ、と焦ってください。ぜひ実物の建築の中に自分を置いて、見て、感じてください。きっと図面や雑誌の写真では気付かなかった新しい発見があるはずです。そして、気に入ったところや疑問、工夫された構造ディテールなどを、メモやスケッチに描いてみてください。デザインストックとして、またあなたの考えるための道具としてきっと役立つはずですし、また他の建築を見たくなると思いますよ。

人間関係・健康

●来年の4月から働くことになりますが、仕事がちゃんとできるか不安です。社会に出て働く前に、何か準備をしたいと考えはじめています。何をすべきでしょうか。(3年・男子)

「仕事」以前に、意識を高く持てば、身につけるべきことが見えてくる。

田嶋和樹 准教授

おそらく大事なことはひとつです。それは、社会人として世の中に出る自覚を持つことです。

具体的には、「仕事がちゃんとできるか不安」に思わなくなるくらい、社会人としてのマナーや気遣い、さらには専門能力を学生のうちに身につける努力をすることです。よく、「社会に出てから身につければよい」という考え方をしている学生がいますが、むしろ逆に「学生時代にできることはどんどん身につける」くらいの気構えが必要なのではないのでしょうか。

もちろん、具体的に仕事をしながら覚えることもたくさんあります。しかし一方で、学生時代に身につけられることもたくさんあります。あなたが、どのような職業に就きたいのかわかりませんが、例えば構造設計の仕事をしたいなら、大学で学ぶ構造系科目を総復習したり、さまざまな規・基準を読んで理解したり、構造設計の演習をしてみたり、とにかく自分でやれることがたくさんあります。

また、OBの人たちに、会社に入ってから勉強したことを聞いてみて、今、自分ができていることを、先回りしてやっておくことも可能でしょう。

悩む前にやれることはたくさんありそうです。まずは、高い意識を持って、第一歩を踏み出すことが必要なのではないのでしょうか。



修士論文
環境系

論文は自分の知らなかったことを知る大きな機会

齋藤賞

住宅建築における音環境トラブルの発生構造に関する検討

丸山明恵さん (M2・井上研究室)

「構 造やデザインがどんなに素晴らしくても、そこに住む人たちにとって住空間の環境が悪く、問題が起きてしまう建築では、本来の役割を果たせない。そんな想いが、このテーマに取り組もうと思ったきっかけだった。

施工不良はもちろん、建築技術や住宅性能の向上に伴う都市の近代化、近隣同士のコミュニケーション不足など、さまざまな理由から、近年、住宅の音環境に係わるトラブルは少くない。そこで、本研究では、判例分析により騒音分野に関する裁判についての実態を把握し、トラブルや訴訟

の減少・未然防止を目的として、音環境トラブルの発生構造について検討を行った。判例分析では、現状把握と問題点の提起を行い、実験では、「住まい方」の説明による発生音レベルの変化に関する実験を行い、最終的にフローチャートによって騒音トラブル発生までの経緯を示した。

「テーマが司法と関わりが強かったので、読み方や意味をつかむまでが難しく、何度も試行錯誤を重ねました。『住まい方』と『発生音』の関係を検討する実験は、実住戸で行いました。実験方法の検討や被験者集めにはとても苦労しました」



修士論文
構造系

これだけ集中して取り組める環境は、人生で滅多にない機会

齋藤賞

U字型コースターの地震時挙動に関する基礎的研究 - 台車の移動が地震応答性状に及ぼす影響について -

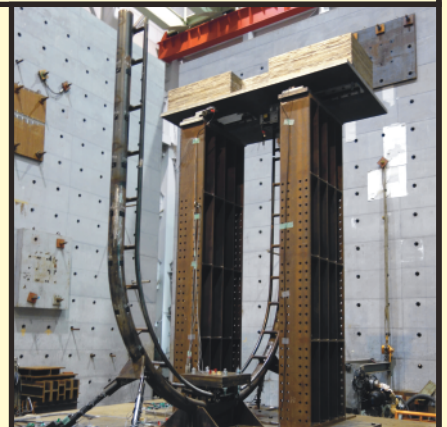
前田浩靖くん (M2・空間構造デザイン研究室)

遊 戯施設は建築基準法で工作物として規定されており、平成19年の告示改正によって、高さが60mを超える場合には、時刻歴応答解析による安全性の確認が求められることとなった。しかし、客席部分(台車)の荷重について、加速度の評価方法などが明確にされていないため、告示改正以降は新規建設がなされていないのが現状だ。

本研究は、台車の荷重が架構に与える影響を把握することを目的として、U字型コースターを対象とした振動実験及び数値解析的検討を行った。振動実験では、非加振時及び地震波加振時にお

ける「台車の自由落下実験」を実施し、台車移動時における部材応力の増大を定量的に把握した。数値解析では、「台車移動を模擬した解析手法」の構築を行い、実験結果と比較することで、解析手法の妥当性を示した。

「遊戯施設は建築以外の分野でも取り扱われているので、研究を進めていく上で、ほかの研究室の先生や、遊戯施設のメーカーの方、機械専門の職人さんなど、いろいろな人に話をうかがう機会が多く、さまざまな分野の考え方も学べて、大変貴重な経験となりました。」



修士論文
計画系

人生でたった一度しかない機会、熱中できるテーマを!

吉田鉄郎賞

近代日本における監獄建築の配置・空間特性に関する研究

山井翔太くん (M2・山中研究室)

学 部4年生の時に刑務所を見学したり、資料を集める中で、その魅力に捕らわれてしまった山井くんは、監獄建築を卒業論文のテーマに研究を行った。監獄建築が持っていた、過剰収容や周辺の市街化、受刑者の高齢化、迷惑施設としての認識など、さまざまな問題を解決できないかというものだった。

修士論文では、研究をさらに継続。戦前期の監獄建築は変化が激しく、増築や移転などが頻繁に行われていた。その要因は増減する収容者数や周辺環境の市街化、複雑な官制のもとでの運営に

よる監獄の多様化などがあった。そこで、それらの要因からくる変化を明らかにし、現代の刑務所に有効な計画を検証した。その結果、刑務所建築は変化を容易に許容できる手法が必要であり、一方で刑務所は計画段階で変化に対応できるものとするのが重要であることがわかった。

「卒業後は、刑務所の設計に携わる仕事をするようになりました。人生すら変えた研究になるほど熱中しました。監獄でもできたのだから、不可能なテーマなんてない。後輩の皆さんも、自分が信じたものに向かって突き進んでください」





修士設計

自身の価値観に基づく主張を大切に！

吉田鉄郎賞

富岡製糸場周辺エリアまちづくり計画 - 世界遺産を支える都市循環機能の確立 -

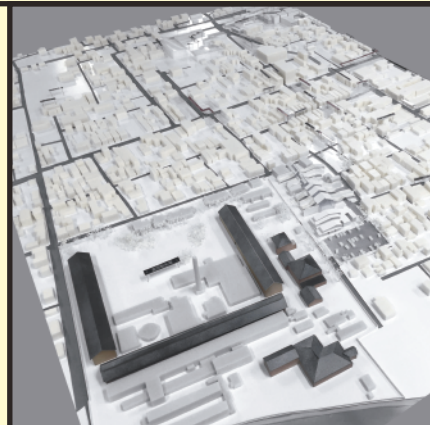
山口高広くん (M2・横河研究室)

群 馬県出身なのに、世界遺産に登録された富岡製糸場のことを、あまりよく知らなかった山口くんは、故郷の地にあるこの歴史的な建造物と、ともに形成された都市を知るためのよい機会になれば、と製糸場をテーマに選んだ。

富岡製糸場周辺は、回遊する魅力が希薄化し、人や車が循環できるネットワークが未成熟だったことに対して、本計画では周辺におけるまちづくりの提案を行った。将来的に変化が予測される都市の動線などを読み解き、歩行者と車がスムーズに循環できるためのネットワークをつくり、都市

循環機能を確立する。また、周辺のまち並みの中に、失われてしまった文化を再発見し、集約と再構築を行った。結果、地域住民と観光客、行政といった異なる立場の人々を紡ぐ建築を提案した。

「実際に現地では話をうかがった人たちとの会話鮮明に記憶に残り、その体験が、私の絶対正義のビジョンとなり、自分の提案の芯となりました。後輩の皆さんには、先輩たちの参照よりも、自分の価値観に基づく主張を大切にしてほしいと思います」

卒業論文
環境系

授業とは違い自分で考え、実行しなければならない

桜建賞

鉛直振動に対する振動性能評価の検討

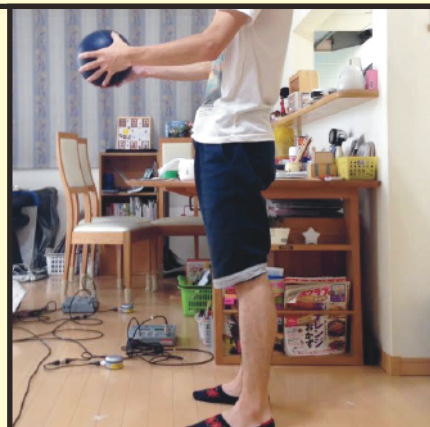
高鹿允義くん・古川淳一くん (建築学科4年・井上研究室)

4 年間の一人暮らしを通して、日頃からさまざまな振動を感じるがあった古川くんは、研究室を選ぶとき先輩たちから床振動の話聞き、人の動作による鉛直振動が身近であるにも関わらず、きちんとした規定がなされていないことを知り、この研究に高鹿くんとともに取り組んだ。

床面の鉛直振動の評価方法は、日本建築学会の鉛直振動に関する性能評価曲線が用いられる場合が多い。各周波数帯域の応答加速度の最大値を読み取り評価を行うが、既報研究では対象周波数の違いにより、振動感覚との対応に変化が生じてい

ることが指摘され、さらに振動知覚時間の考慮が必要であると考えられている。そのため対象周波数の違う物理量に着目し、振動感覚に対応する振動応答物理量の詳細な検討を行うとともに、長期振動に対する補正についても検討した。

「自分で考え、新しいことを発見できたときの喜びや達成感、授業では得ることができません。後輩たちには、自分の興味を明確にして、自分自身で考え、行動し、どんどん新しいことに挑戦してほしいと思います。自分の意見が明確であれば、先生も友人も親身になって考えてくれます」(古川)

卒業論文
構造系

自分の論文が次の研究につながっていくことが嬉しい

桜建賞

偏心 RC 造骨組に対する偏心率規定の根拠と妥当性に関する基礎的検討

鎌倉武人くん (建築学科4年・白井研究室)

地 震動によって建物が上下左右に振られることはわかるけど、ねじれることがあるの!?! そんな驚きが、鎌倉くんが偏心に関する問題を研究対象に選んだ最初のきっかけだった。

現在、鉄筋コンクリート (RC) 造建物の設計は、新耐震設計法が用いられており、その中で偏心率は0.15以下に規定されている。偏心率とは重心と剛心のズレを割合で表したもので、偏心率が大きいと地震動で建物がねじれによる損傷が生じる。しかし、偏心率を0.15以下に制限している根拠、偏心率によってねじれ挙動を評価する妥当性、ま

た、新耐震設計法では偏心率が0.15を超えてしまう場合に骨組の耐力を割増す規定になっていることの妥当性、が明確ではなかった。そこで、以上3点に着目して、偏心率の根拠に関する文献調査や例題建物を用いた解析を行い検討した。

「解析は上手くないことの方が多くて大変だったけど、完成したときは達成感がありました。研究がはつきりと何の役に立つかはわかりませんが、長い月日で考えたとき、法律を改訂するきっかけになるかもしれません。そういう期待が卒業論文を作成する楽しみになるのかもしれない」



卒業論文
構造系

図面通りに試験体が建ち上がった際の感動は大きかった

桜建賞

D.M.付制震アウトフレームを用いた連結制震システムの性能実験

田中友基くん（建築学科4年・秦研究室）

3年次までに学んだ分野のなかで、最も理解することができなかった分野が振動工学であったが、あえて理解を深めたいと、田中くんは、秦研究室に飛び込んだ。基礎を学び、卒業研究着手時には、迷わず今回のテーマに取り組んだ。

この研究では制震対象に制震装置を設置せず、D.M.や粘性ダンパーを付加したアウトフレームを柔軟接合で連結する「連結制震システム」を提案した。対象に装置を設置していないことで、居住空間の設計自由度が向上することが期待できる。また、提案システムには高い制震効果と施工性のよさが

ある。振動実験により、提案システムを構築している設計式の整合性を確認し、また、地震波加振実験により制震効果を証明した。

「些細なミスが後々大きな違いとなって現れることに最も苦戦しました。特に、解析は数値一文字を間違えるだけで、実験結果と解析結果に違いが生まれてしまう。実験は、大規模でした。図面通りに試験体が立ち上がったとき、さらに解析結果と実験結果が一致した際の喜びは、大変大きいものでした。構造系の研究室でなければ味わうことができなかったものだと思います」

卒業論文
計画系

人のつながりに支えられて、研究が最後まで行き着いた

桜建賞

精神障害者施設の建築計画における留意点に関する研究

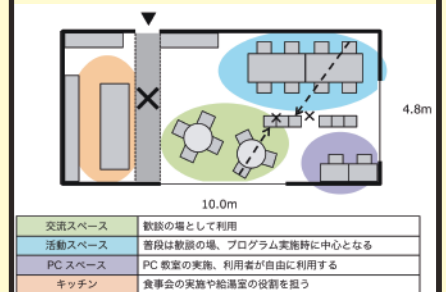
飯田千恵さん（建築学科4年・八藤後・中田研究室）

精神科に通う友人がいたことがきっかけだった。バリアフリーのように精神障害者に対して環境サイドから人に歩み寄ることはできないのだろうか。そんな想いから飯田さんの研究は、はじまった。

精神障害は地域移行が進む中、まだまだ他の障害と比べ建築の分野において、研究が進んでいない。そこで、地域で暮らす精神障害者にとって、最適な建築環境とはどのようなものかを研究した。光や色、空間の広さや空間の質などの空間構成に関わる具体的な項目について、それぞれどの程度

苦手に感じるかを、精神障害者の方たちへアンケートを行い調査した。また、調査結果から、精神障害者の地域生活において、日中の居場所のひとつを担う「地域活動支援センター」の部屋について新たな提案を行った。

「既往研究も少なかったため、自分で地域活動支援センターの利用者や職員の方へインタビュー調査を行い、さらに地域生活の現場を知るため、ボランティアとして週1〜3日程度施設を訪問しました。人のつながりによって研究がどんどん掘り下げられていきました」

卒業論文
企画系

理想が打ち砕かれ現実を教えられたヒアリング調査

桜建賞

しゃれ街条例にもとづく街並み景観づくり制度の運用実態に関する研究

李潤貴くん（建築学科4年・川島研究室）

2003年、東京都は「東京のしゃれた街並みづくり推進条例」を制定し、「街並み景観づくり制度」を整備した。これは、地区のルールを専門家の支援のもと民間主導で作成し、それが知事に承認された地区では民間の協議会が事前協議を通し、建築物の外観などの誘導を図ることができる制度だ。しかし、制度を運用していく過程で東京都の関与は少なく、各地区の負担が大きく、実際に景観誘導が行えているのかは明らかになっていなかった。そこで、全GL承認地区の実態調査から関係する各主体の関与実態を整理・考察し、

その役割について明らかにした上で、本制度適用の際、GL案作成や事前協議を確実に進めるために各主体に期待される役割を示した。

「調査の過程でさまざまな人と出会い、話を通して、現実を教えられました。理想論は打ち砕かれましたが、その繰り返しが勉強になり、楽しかった。考えていたことや調査してきたことが、先生にも指導していただきながらどんどん凝縮されていきました。後輩にメッセージがあるとしたら、問題をどうしたら解決できるのかを突き詰めて考えること！それを研究すると楽しいはず！」





卒業設計

他者との関わり合いが作品をつくる上でとても大切

桜建賞

セレンディピティの行方

土屋伸吾くん（建築学科4年・今村研究室）

読

書好きがきっかけで図書館の設計に取り組んだ土屋くんは、本が電子化され空間を必要としない図書館が可能となった今、建築を持つからこそできる図書館をテーマとし、目的の本へたどり着く過程で違う本に巡り会うような「偶発的出会い（セレンディピティ）」を誘発する図書館を高円寺に提案した。

建築のスケールでは、本の分類を解体し、アクティビティによる分類で再構築する。都市スケールでは、新しい日常動線をつくりだすことで、本を借りることを目的としない人々も引き込む。建

築スケールでは、性質の異なる4つの螺旋が絡み合い、他の螺旋と混じり合うことで、建築の偶発性を生み出す。この3つのスケールから、「偶発的出会い」を誘発する図書館をつくりあげた。

『『偶然の出会い』は定量化できるものではないので、建築を訪れた人々が、偶然に思いもよらない素敵なモノ、コトと出会う構成を考えることは、最も大変でした。今までで一番、先生、先輩、後輩とコミュニケーションを取りました。後輩たちには、同級生同士で互いの作品を互いに高め合うスタンスで臨んでほしいと思います』



卒業論文

卒業論文は自分の限界に挑戦する、とてもよい機会でした

桜建賞

ダイレクトヒートゲインによるリサイクル床材の蓄熱効果に関する研究

佐々木美和さん（短大2年・吉野研究室）

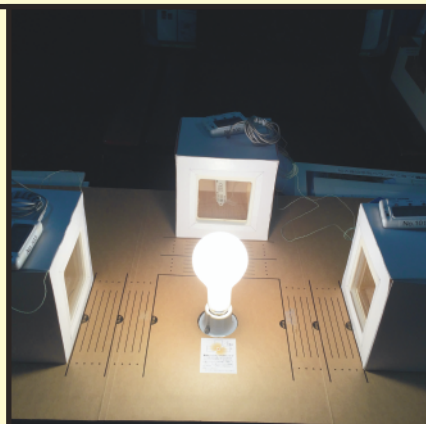
吉

野先生の授業でパッシブデザインについて学んだことがきっかけで、吉野研究室に入った佐々木さんの研究は、既存のダイレクトヒートゲインを使用した際に、最も効果的な床材を明らかにするというもの。

冬の節電対策は、暖房をつけないというくらいで快適に生活しづらく、冬のパッシブ手法は夏に比べて少ない。また、自然エネルギーを用いた節電や省エネは、これからの時代、さらに必要となっていく。そこで、直射日光を部屋に取り入れ、取り入れた熱で部屋を暖かくするパッシブ手法のダ

イレクトヒートゲインとリサイクル床材を利用して、節電しながらの快適な暮らしを目指した。具体的には、箱模型実験と現場測定、建築熱環境シミュレーションの3つを行い、何十回もの組み合わせの実験や測定、シミュレーションを重ね、蓄熱効果の高いリサイクル床材を明らかにした。

「卒業研究の楽しさは、学んできた自分の能力を発揮できること、新たに学んだことを形にできることだと思います。自分の限界に挑戦する、とてもよい機会でした。学生のうちに自由にできることに一生懸命取り組むのは自分の糧になると思います」



卒業設計

自分でテーマを見つけ、やりたいことをデザインできる

桜建賞

さくらのあと - 佐倉城址公園に咲く7つの門 -

内藤麻美さん（短大2年・矢代研究室）

観

光客の減少や駅前商店街のシャッター街化など、さまざまな問題を抱える千葉県佐倉市を、どう活性化できるか。これが、内藤さんのテーマとなった。佐倉城址公園は、国立歴史民俗博物館と緑豊かな公園空間を誇る、歴史と伝統の遺伝子を残すまちの拠点。ここに佐倉を訪れる人々との出会いと交流を鍵に、市民の新たな集いの場を提案した。公園を「憩い」⇄「学び」⇄「集い」の場と捉え、佐倉城内の門跡に新たな交流の形を創出する。再建・新築する門に、『感・巡・活・眺・眺・創・触』という各主題に基づいた機能を付加

することで、さまざまな交流や活動を促す起点とした。門のネットワークは、散策・回遊のための散歩道を育み、花畑・森・泉・広場とともに、四季を味わい成長する屋外空間を形成する。そうして城址公園は、「さくらのあと」として、時を重ねる中で、まちの新たな居場所になっていく。

「自分の興味のある題材を選ぶことができるのが楽しい一方、最初から最後まで自分で計画をしていくことが難しかった。それでも、少しずつ形になっていって、完成したときの達成感は、これまでの授業では味わえないものでした！」



1 | 2015年度、新任紹介

中島 肇 教授

4月から新任教授となります。建築構造実験と大学院の建築構造設計演習の非常勤講師をしていましたので、駿建掲載は3度目になります。

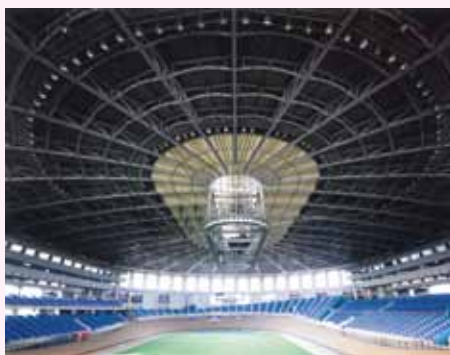
32年間務めた建設会社では、技術開発、構造設計、現場管理に従事してきました。鋼構造はもちろん、膜・ケーブル構造、張弦梁構造などを設計し、さらに特殊な構造物に対する技術コンサルも担当しました。この技術コンサルはエンジニアとして非常にやりがいのある仕事であり、設計やディテールを整理して、どのように造っていくかといった“ものづくり”の基本と応用を実践してきました。

また、“雪”との出会いは、明るい室内空間を維持するために膜屋根に積もった雪を合理的に処理しようとする研究開発から始まり、既に25年になります。

鋼構造の構造デザインや構造設計手法、あるいは雪と建築の諸問題などの研究を通して、エンジニアとしての姿勢、想像力と創造力について、皆さんと一緒に考えていきたいと思っています。



なかじま・はじめ：1957年東京都生まれ。1981年日本大学理工学部建築学科卒業。1983年同大学院理工学研究科博士前期課程建築学専攻修了（斎藤公男研究室）。1983～2015年清水建設株式会社。2006年博士（工学）（日本大学）。2000～2004年、2009～2015年日本大学理工学部非常勤講師。2011年～北海道科学大学客員教授。



左：グリーンドーム前橋（1990年竣工、群馬県）：円弧トラスとアーチ状小梁、ベアケープルによる内部空間の構造デザイン。施工時解析の予測通りに浮上し自立した張弦梁に感動した。技術指導は恩師斎藤公男先生。右上：268 Orchard Road Project（2014年竣工、Singapore）：3つのガラス・ボックスは、それぞれ張弦ロッドとマリオン兼用の鳥籠状格子構造とを組み合わせた構造体で支持している。構造体はすべてステンレス。左：『雪と建築』（共著、2010年8月、技報堂出版）：雪により発生する諸問題に配慮した建築物を設計する上で必要とされる基本的知識をまとめた本。雪の問題は、雪荷重から発生するものだけでなく、建築を計画する段階で回避できる問題が多く、また私たちの住む少雪区域でも発生している。

長沼 一洋 教授

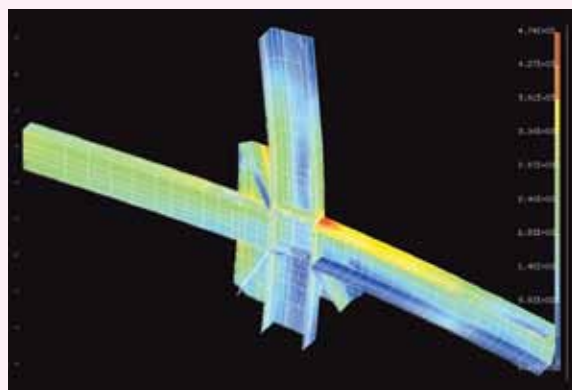
中学生のとき、東京タワーの設計者である内藤多仲博士の業績を紹介する映画を見て、博士が同郷の人であることを知り、構造技術に興味を持ちました。大学では鉄筋コンクリート構造の実験や解析を経験しましたが、部材が外力を受けて、どのように変形し、どの程度の力に耐えられるのかをコンピュータで予測する解析技術に魅力を感じました。

以後、会社に入ってから、さまざまな構造物の強度や安全性を確認するための解析業務を数多く担当しつつ、模型実験を通して、構造物がいかに外力に抵抗し、どのような損傷が生じるのかを、目と耳で感じてきました。また、阪神・淡路大震災などの地震被害を目のあたりにし、建物を安全に設計することは技術者の使命だと強く認識しました。

今後は、実務での経験を生かしながら、安全な建物を設計し、それを維持するための技術を皆さんと共に学び、研究したいと思っています。



ながぬま・かずひろ：1957年山梨県生まれ。1981年千葉大学工学部建築学科卒業。1983年同大学院修士課程修了。同年、株式会社大林組入社、技術研究所附属。その後、建築構造研究室長、環境技術研究部長等を務め、2015年3月まで勤務。1992年博士（工学）（千葉大学）。2011年東京工業大学客員教授。2014年日本大学理工学部非常勤講師。



鋼管コンクリート柱・鉄骨梁接合部の変形と応力。



鉄筋コンクリート梁の開口補強方法検討のための解析モデル。

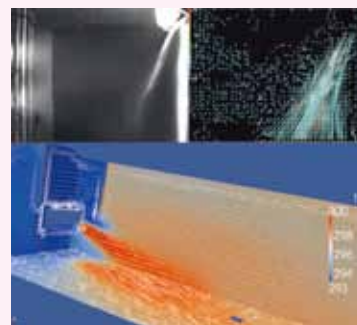
井口 雅登 助教

本年よりお世話になることとなりました井口雅登です。私は、学生時代に建築環境工学に興味を持ち、音や電磁環境に関する研究を行ってきました。大学院修了後は、電力会社で建築設備改修現場の工事監理と住宅におけるエネルギー消費や、暖冷房設備に関する研究に携わってきました。専門は住宅における暖冷房設備です。床下空間を給気経路として活用し、エアコン1台で住宅全体を空調する全館空調システムの研究を行っています。ちょうど私の自宅の建築時期が重なりましたので、自宅にも研究対象のシステムを導入し、自ら実験台となり生活しています。

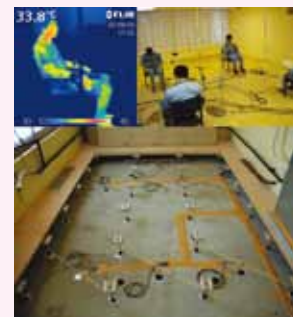
建築物の中で人間が豊かに活動するには、建築設備の助けを借り、少なからずエネルギーを消費しなくてはなりません。現在、日本はエネルギーに関するさまざまな課題を抱えています。皆さんと一緒に楽しく研究を行って、最適解を探し続けていきたいと思っています。どうぞ、よろしくお願いたします。



いぐち・まさと：1977年神奈川県生まれ。2000年日本大学工学部建築学科卒業。2002年同大学院理工学研究科 博士前期課程建築学専攻修了。2002～2015年東京電力株式会社。2009～2011年東京大学大学院工学系研究科 受託研究員。2003年一級建築士、気象予報士。2014年 博士（工学）（東京大学）。



左上：研究対象の全館空調システムが導入された住宅のエアコン、吹き抜けおよび外観。 右上：エアコン吹出口から吹き出される空気の可視化実験と、数値流体計算結果。 右：床下空間を給気経路とした実験室における被験者実験と床下空間計測の様子。



加藤 千晶 助手

今春より建築学科の助手を務めさせていただくことになりました加藤千晶です。元は文化財の修復に興味があったことから、建築の分野に進みました。建築史の授業を受け、各地の古建築を見てまわったことで、次第に古建築が持つ空間や意匠の魅力に惹かれ、学部・大学院では建築史・建築論研究室で社寺建築の研究をしました。卒業論文では、重枝先生のご教示を受けながら、長谷寺本堂（奈良県）の計画案を描いた3枚の古図を分析し、現存する本堂のデザインがどのように決められていったかを研究しました。以後、日本建築史をデザインの視点から捉えなおしたいという思いから研究を続けています。

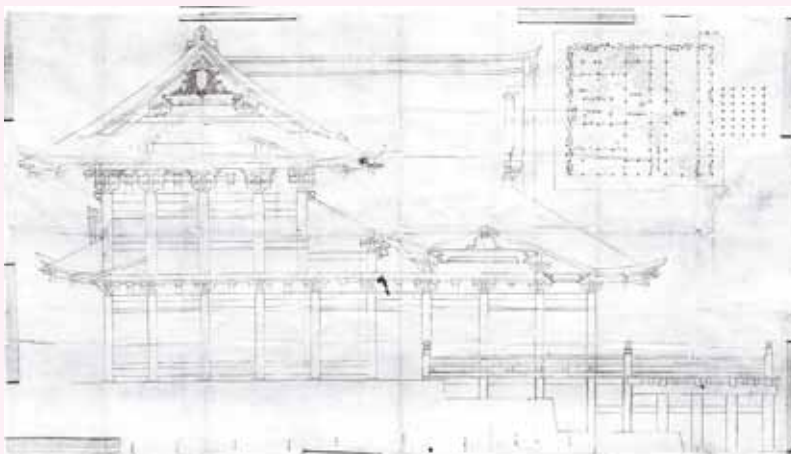
未熟ではありますが、先生方や学生のみなさまのもとで学び、みなさまのお役に立てるよう、励みたいと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。



かとう・ちあき：1989年茨城県生まれ。2012年日本大学理工学部建築学科卒業。2014年同大学院理工学研究科博士前期課程修了。



長谷寺本堂外観。



長谷寺本堂建地割図（再建長谷寺本堂の計画案を描いた古図の一つ）。

2 | 毎月開催、誰でも参加できるレクチャーシリーズ「オウケンカフェ」レポート

理工建築にとどまらず、日大建築系すべての卒業生による会「日大桜門建築会」、略して「桜建会」。その桜建会が企画してゲストを招くレクチャーシリーズ「オウケンカフェ」が2013年7月から月に一度のペースで開催されている。卒業生はもちろんのこと、現役学生たち、また外部の誰もが参加可能だ。今回は、2015年1月に行われた田中浩也さん（慶応大学准教授、ファブラボジャパン発起人）のレクチャーの学生レポートを紹介。2015年度のシリーズは、2015年4月22日（水）からスタートします。ゲストは、若手建築家として注目されている稲垣淳哉さん（建築家／Eureka共同主宰）。さまざまな世界の最前線で活躍する人の話から、学ぶことは多いはず。大学の授業だけでは伝えることのできない、さまざまな世界の話聞いてみよう！

-Report 1-

購入していたものを自分で創り出す時代へ

| 下村耀子（3年）

今回のゲストは、ファブラボジャパンの田中浩也さんでした。3Dプリンタやレーザーカッターなどのデジタル工作機械が自由に使える市民工房「ファブラボ」は、鎌倉、渋谷、広島など日本に12ヶ所あり、また多くの発展途上国にも展開しています。

「3Dプリンタはモノをファックスできる」という田中さんの言葉が印象的でした。家電が壊れたら部品の3Dデータをダウンロードして自分で修理する、データシェアサイトに3Dデータを載せると世界中の人にモノを公開できる、地球に忘れてきたスパナを宇宙まで送ってもらう……。全てが未来のことを話しているような気がしました。

ファブラボでは子供、主婦、高齢者など、さまざまな世代が集まり、コラボレーショ

ンをして工作しています。3Dプリンタという最新で難しそうな機械を使って、若い世代と古い世代が関わり合えるのは、アナログのモノが出てくるからであり、だからこそ高齢者も楽しむことができます。

世界中にあるファブラボでは、モノが地域性（気候や風土）を持って変化していき、そのリアクションはデジタルで見ることができます。3Dプリンタは単なるデジタルな機械ではなく、アナログ要素を持っているから、わかりやすい。これから3Dプリンタが更に普及すれば、今まで購入していたものを自分でつくることができるようになり、より自分に合ったモノが手に入ります。そして日常生活は、もっと創造的で豊かなものになるような気がしました。 **駿**

-Report 2-

分解の自由、形状の自由、その

田中さんのファブラボを通じた建築への考え方は、いわゆる「持ち運べる建築」であり、本人も影響を受けたと明らかにしているバックミンスター・フラーに近い。建築における「機能」とは広義に建物の目的を示し、建築家の多くはその目的に即した設計を行うが、彼は「持ち運べる」という目的そのものをデザインしたといえる。

では、建築とは異なる意味において「機能」を今後デザインできるとしたら、どういった可能性があるだろうか。私はその可能性のひとつが、〈マシン〉にあると考えられる。〈マシン〉と言っても、ハイテクスタイルのように機械化させる美意識の問題だけではない。今回の例に関していえば、カッティングマシンによって建築がパーツ化した（本来建築はパーツの集合ではあるが、



オウケンカフェ、レクチャー風景。毎回、レクチャーの後は、学生、先生も一緒にとてもフランクな感じで質疑応答が行われている。終了後は、近くのお店で懇親会。学生も参加自由です。

* 毎回19時スタート。場所は、駿河台キャンパス5号館5階スライド室1。参加費は、桜門建築会会員・日本大学学生は無料、それ以外は1,000円（当日に入会すれば無料）。会場ではキャッシュオンにてドリンクを販売します。



田中浩也先生。

-Report 3-

3Dプリンタは、建築業界をどう変える？

次は、材料の自由

|立川博行（研究生）

ここでいうパーツとはプラモデルのような組み立ての「手軽さ」を示す。このように〈マシン〉が建築を〈異質化〉するものと捉えれば、3Dプリンタは建築を自動化しようとしているといえる。ただし目的はそれぞれ異なり、手軽さによって建築に多くの人に関われる機会を提供した前者と、無人で建築を試みる後者と、実は真逆のことを行っている。

一方、それぞれが何らかの自由を獲得しようとしているという点は共通しているといえる。カッティングマシンは分解の自由、3Dプリンタは形状の自由。このように考えると、次に注目すべきは材料ではないだろうか。

■

|稲葉来美（3年）

え続けることはない。そして、これまでベルトコンベアの鑑賞者であった私たちは、創造者として、ものの循環を生み出す人間・生活になるであろう。そうなったときに、設計者の立場はどう変化していくのであろうか。

会の終わりに、3Dプリンタの普及は「職人の存続の危機」ではなく「職人の職能の転機」である、といった話にまで昇華された。このことは、2ヶ月ほど前にGoogleが発表したFluxの普及とともに、今後の建築業界に大きく関わってくるであろう。

卒業設計の手伝いの最中ではあったが、オウケンカフェでの話はとても面白く、非常に刺激的であった。この経験を自分の今後の設計活動に活かせるよう咀嚼していきたい。

■

「この3Dプリンタはいつか必ず壊れます」この言葉から3Dプリンタの説明書ははじまったという。「未完成品であること」を謳うこの言葉からは、自虐的な印象を受けるが、その後続く文は「まずは3Dプリンタの部品のデータを我々のホームページからインストールして、最初に部品をつくってください」というもので、新しい世界が来ることを象徴する文章であった。

産業革命以降、大量生産・消費を続けてきた私たちの生活は、ベルトコンベアに乗ってきた新しいものを受け取っては（購入）古いものをまた置く（廃棄）と喩えることができ、廃棄されたものは蓄積するため、ものは増え続ける。しかし3Dプリンタが普及し、データが増え続けても、データは物理的には存在しないため、ものが増

3 | 建築学科・短大 人事

○ 建築学科人事

・4月1日付の人事で、蜂巢浩生准教授、渡辺富雄准教授が教授に昇格した。大川三雄教授が、新たに特任教授として建築学科所属となり、引き続き学生の教育・研究に携わる。

・4月1日付の人事で、新しく建築学科のメンバーになったのは、中島肇教授、長沼一洋教授、井口雅登助教、加藤千晶助手、青島充臨時職員、春日貴美子臨時職員である。

・河合晴香助手、中田弾助手、鎬木雄太臨時職員、町田昂弘臨時職員が3月31日をもって退職した。

・建築学科の非常勤講師の新旧交代は以下の通り（敬称略）。

〈新任〉一瀬賢一（建築生産実験）、今村水紀（デザイン基礎、建築設計Ⅰ）、永曾琢夫（建築設計Ⅲ・Ⅳ）、遠藤克彦（建築設計Ⅱ・Ⅲ）、大塚秀三（建築生産実験）、加藤亮一（建築構法Ⅱ）、式地香織（デザイン基礎、建築設計Ⅰ）、田井勝馬（建築設計Ⅲ・Ⅳ）

〈退任〉伊藤梅雄（都市調査及び演習）、粕谷奈緒子（デザイン基礎）、佐藤文（建築設計Ⅲ、設計演習Ⅱ）、佐藤正章（循環環境管理）、高橋真奈美（建築設計Ⅵ、設計演習Ⅲ）、鍋島千恵（建築設計Ⅲ・Ⅳ）、飛坂基夫（建築生産実験）、船木幸子（建築設計Ⅳ、設計演習Ⅲ）、和美廣喜（建築構法Ⅱ、建築生産実験）

・建築学専攻の非常勤講師の新旧交代は以下の通り（敬称略）。

〈新任〉北茂紀（木質構造特論）、八木佐千子（建築設計マネジメント特論）、若松巖（司法と建築）

〈退任〉尾田清貴（司法と建築）、小嶋勝衛（都市居住環境特論）、染谷正弘（建築設計マネジメント特論）、中島肇（建築構造設計演習）、長沼一洋（建築構造解析特論）

○ 短大建築・生活デザイン学科人事

・4月1日付の人事で、高田康史短大副手が助手に昇格した。

・短大建築・生活デザイン学科の非常勤講師の新旧交代は以下の通り（敬称略）。

〈新任〉川嶋勝（美術・デザイン史）、中田弾（建築ユニバーサルデザイン）

〈退任〉岡山理香（美術・デザイン史）、黒木二三夫（建築力学Ⅰ、建築力学演習、建築基礎実験Ⅰ、建築生産実験、建築各種構法）、小島陽子（日本・アジアの建築史）、飛坂基夫（建築材料Ⅰ、建築材料Ⅱ）

〈建築〉を思考し、創り、論ずることは、楽しい！

text= 染谷正弘

建 築家になりたい、そのために建築を学びたい、僕がそう決心したのは高校3年生の一学期でした。もう40年以上も前になります。

それは、期末試験を終えた土曜の昼下り、悪友たちと映画を見て上野公園を散策していたときのこと、木漏れ日のなかにキラキラと輝く真っ白な石の塊のような建築が忽然と現れたのです（写真）。まるでお城の石垣、真新しい城址のようでした。そのとき、こんな斬新な現代建築があるんだ、こんな建築をつくれたらどんなに楽しいだろう、それから日大理工建築学科を受験、入学、そして僕の〈建築〉への道ははじまりました。



東京文化会館（1961 / 設計：前川國男 / 写真：染谷正弘）

上野公園のその建築は、日本近代建築のパイオニア、**前川國男**（1905-1986）の代表作「**東京文化会館**」、日本有数のすばらしいコンサートホールです。そのお城の石垣のような外観は、白大理石の碎石で覆われた「大ホール」部分でした。その近くに建つ「**国立西洋美術館**」は近代建築の3大巨匠のひとりル・コルビュジェの設計、若き日の前川國男はパリで彼に建築を学んでいます。そうしたことを知ったのは、もちろん大学で建築を学んでからのことです。

建築とは何か？ 建築デザインはどうあるべきか？ 大学では、建築の多くのことを学びました。大学2年後期の設計製図の授業で、僕は「眼から鱗（うろこ）が落ちる」体験をしています。それは低層集合住宅の設計課題でした。そのときの設計製図の先生が、僕の設計内容の良し悪しを、言葉で客観的に論理的にきちんと説明してくれたのです。それほどに明快に建築デザインについて納得のいく設計指導を受けたのは初めてでした。その授業の後、設計製図の先生の多くは、学生に斬新な建築デザインを求められるけれど、その良し悪しの判断基準は感覚的で曖昧で客観性に乏

しく、結局は自分好みのデザインを押し付けているだけではないか、そう思えたほどです。後年、僕も理工、短大、大学院、また他大学でも非常勤講師をしましたが、その授業体験は貴重な糧となりました。

現代都市生活と居住空間、その史的背景、技術思想など、建築文化の成り立ちへの透徹した眼差しのもとに、僕のつたない設計図面を真正面から批評し指導してくれた先生と巡り会えたことは、とても幸運でした。それは、その後の僕の建築観や建築思想の方向性を決定づけた〈建築〉との出会いでもあったのです。その先生こそが、僕の建築の師となった建築家・**黒沢隆**（1941-2014）でした。

黒沢先生は、主に1970年代、80年代の建築ジャーナリズムで数々の住居論、建築論を展開し、建築作品を発表し、おおいに活躍されました。日大の理工、生産、芸術の各学部で長年教鞭もとられています。著書も多く、特に「**個室群住居**」論を提唱、実践した建築家として有名です。残念なことに、2014年3月に逝去されました。彼は、建築家である以上に、生涯〈建築〉を思考しつづけた建築思想家であったと僕は考えています。

1970年代、青春真っ只中の20代の僕は、黒沢先生主宰の黒沢隆研究室で、毎日ひたすら図面を描きつづけました。そこで、建築設計のABCを学び、〈建築〉を思考し、論ずることの喜びを思い切り体験していた。何よりも「建築は、楽しい!」、それを青春とともに体感したからこそ、建築設計を生涯の仕事にできたのだと今思います。



個室群住居-ホシカワキュービクルズ（1977 / 設計：黒沢隆 / 写真：興水進）

そめや・まさひろ：1953年千葉県生まれ。1976年日本大学理工学部建築学科卒。1979年同大学大学院博士課程前期修了。1979～1983年黒沢隆研究室。1987年株式会社デザインショップ・アーキテツツ設立。2008年株式会社DSA住環境研究室設立。1992～1997年日本大学理工学部非常勤講師。2009～2014年同大学院理工学研究科建築学専攻非常勤講師。

Contents

- 02 **[SPECIAL FEATURE]**
先生が答えます。
学生のリアルな悩み25
- 14 **速報! 2014年度に受賞した
修士論文・設計 & 卒業研究・設計12**
- 18 **[NEWS & TOPICS]**
2015年度新任紹介
「オウケンカフェ」レポート
建築学科・短大人事
- 22 **[Architecture & Me]**
vol.79 〈建築〉を思考し、創り、論ずることは、楽しい! (染谷正弘)
- 24 **[EVENT REVIEW]**
mosaki のイベント巡礼 vol.12
「JUTAKU Timeline エレメントからみる住宅の可能性」

SHUNKEN

2015 Apr. Vol.43 No.1

「駿建」

発行日：2015年4月1日

発行人：中田善久

編集委員：佐藤慎也・田嶋和樹・橋本修・長岡篤・古澤大輔・中田弾・山崎誠子・廣石秀造

編集・アートディレクション：大西正紀 + 田中元子 / mosaki

発行：東京都千代田区神田駿河台1-8-14 日本大学理工学部建築学科教室

TEL：03(3259)0724

URL：<http://www.arch.cst.nihon-u.ac.jp>

※ご意見、ご感想は右記メールアドレスまで<shunken@arch.cst.nihon-u.ac.jp>

event review

mosakiのイベント巡礼 vol.12

JUTAKU Timeline エレメントからみる住宅の可能性

会場：リビングデザインセンターOZONE
2015年1月8日（木）～2月10日（火）

社会と住宅と建築家から、 20年を見つめる体験

◆ 小さな展覧会だけど、大きなテーマ。本展では、OZONE リビングセンターが設立された1994年から2014年までの20年間に起きた、住宅にまつわる出来事をまとめているんだって。

♥ 会場に入ると、目の前にいきなり、社会的な出来事や住宅史について振り返る、20年分の年表が！ こりゃすごいね。主立った住宅作品が、どんな社会状況の中で建てられたか、つぶさにわかるようになっている。

◆ 奥へと進むと、階段やバストイレ、キッチンやリビングが現れて。さながら真っ白な平屋の住宅みたい。

♥ 見て見て！ 外壁やサッシまでついてるよ！ 会場は決して広くないはずなのに、ぐるぐる歩き回ってあちこち見るのが楽しい。広く抜けるところと、小さくこもるところのコントラストが効いていて、狭さを感じさせないね。

◆ しかもその家のあちこちから、いろんな展示

が顔を出すのが面白い。ただ展示物が置かれているのではなくて、いろんな小物にプリントされていたりして、展示の仕方そのものがユニークだよ。

♥ 展示内容自体はデータやテキストが多いのに、退屈しないで楽しく見ることができる。まるで原寸の立体絵本みたいだよ。

◆ しかも協賛企業の展示は、トイレではTOTOの便器、キッチンでは東京ガスのコンロといったように、企業の商品である現物とともに、然るべきロケーションで出てくる。その内容自体も、ただの広告的なものじゃなくて、あくまでその企業の20年と今後を展望する、しっかりしたテキストが添えられていて。これは素晴らしいね。

♥ 会場構成は、藤本壮介さんの事務所出身の建築家・青木弘司さん。真っ白な家の中で、展示物だけが色を持った存在として浮き上がるよう

に見える、という狙いがあるんだね。その設計が、すごく効いてる。生活感が感じられるような小物まで白で作り込まれていて。ひとつひとつ、凝ってるなあ。

◆ 奥にはその青木さんのほか、非常勤講師の伊藤暁さんをはじめ、猪熊純さん、鈴木謙介さん、長崎辰哉さんの住宅作品の模型が展示されていて、さらに彼らが影響を受けた住宅についても書かれている。40歳前後の建築家たちにとって、この20年とはまさに、一生活者から建築家へとスライドしていく、大事な時期だったんだね。

♥ オゾンリビングセンターの20周年にちなんで本展だけど、それに留まらず、社会と住宅関連企業と建築家、それぞれの視点からこの20年を見つめる、多角的な企画内容になっていて、本当に意義深かった。コンパクトなのに、とっても充実した内容。うーん、これは時間をかけて何度も見たいなあ。常設してほしいくらい！



左：ひとつの家のように設えられた会場構成。リビング・ダイニングの外側にメインのグラフィック。中：エントランス（玄関部分）に入ると、この20年の住宅史年表が展示されている。右：キッチンには、キッチンの歴史を展示。それぞれの諸室に、それぞれのエレメントが説明されている。

Recommend | 2014年4月 - 7月

【1】「藤本壮介展 未来の未来」| TOTOギャラリー・間 |

会期：2015年4月17日（金）～6月13日（土）

建築家・藤本壮介のこれまでの活動を通して、これからの建築の可能性を提示する展覧会。2000年の「青森県立美術館設計競技」で、無名ながら2位を獲得し、鮮烈デビューを飾ってから15年。これまでに挑んできた住宅から公共建築、また、進行中のプロジェクトを通じて、藤本の思考、創作の過程を紹介するとともに、ここからの「建築の未来」の可能性を示す。

【2】「シンプルなかたち展:美はどこからくるのか」| 森美術館 |

会期：2015年4月25日（土）～7月05日（日）

19～20世紀にかけて、ヨーロッパではさまざまな学問で「シンプルなかたち」の美学が再認識され、工業製品や建築のデザイン、近代美術などに多大な影響を与えた。一方「シンプルなかたち」は、自然の中や世界各国のプリミティブアート、民俗芸術、伝統文化などにも数多く見出すことができる。本展は、先史時代のオブジェから、現代アーティストによるインスタレーションまで、古今東西の「シンプルなかたち」約130点を、地理的、歴史的なつながりを示しながら展示し、時空を越えた普遍的な美を描き出す。

【3】「大阪万博1970 デザインプロジェクト」| 東京国立近代美術館

会期：2015年3月20日（金）～5月17日（日）

高度経済成長まっただなかの1970（昭和45）年に開催された国民的な祭典「大阪万博（日本万国博覧会）」は、未来都市を想定したデザインワークの実験場だった。準備段階からデザイナーが動員され、シンボルマークやポスターやイラストをはじめとするプロモーション素材の制作、さらに会場内のサイン計画やパビリオンの展示設計などにも参加し、デザイナーという職能の可能性をさまざまなかたちで示した。大阪万博を大成功に導いたデザインワークを振り返り、デザイナーにとって万博とは何だったのかを考える。

【編集後記】

今号の特集は、学生の皆さんのリアルな悩みに先生方が答えるというものでした。いかがでしたでしょうか。長く子どもと呼ばれていた時代から、徐々に大人扱いをされはじめている皆さんは、社会人となる手前で、学生生活から将来のことまで、さまざまな悩みを抱えているということがわかりました。実のところ、この特集の不安は、先生方が、皆さんの悩みにどれくらい答えられるかということでした。今の時代に生じる悩みは、明確な答えが存在するものではありません。だからこそ、先生方の回答力も求められたわけです。しかし、ふたを開けてみれば、そんな不安は吹き飛ばされました。先生方は全力で悩みを受け取り、寄り添い、そして丁寧に答えてくれたと思います。それほどに日大の先生方の人間力の高さが表れたものとなりました。本当にどの先生も話しやすく素晴らしい方ばかりです。何かあればぜひ気軽に話かけてみてください。きっとあなたにとってよいきっかけとなるはずです。（大西正紀+田中元子/mosaki）

「駿建」では、在学生、教員、非常勤講師の皆さまからの、コンペやコンクール、学会、スポーツ大会、その他の受賞・表彰に関する情報提供を下記メールアドレスにて受け付けています。<shunken@arch.cst.nihon-u.ac.jp>